

大学生の国際性意識に関する研究

早矢仕 彩 子¹⁾

University Students' Internationality Awareness

HAYASHI Saiko

要 約

最近よく使われる言葉に国際性という言葉がある。各種教育機関において、教育の理念を掲げるとき、また学生募集のキャッチフレーズとして、“国際性豊かな人を育てる”、“国際性の涵養”のような使い方で頻繁に使用されている。

この研究は、大学生 436 人を対象に質問紙調査を行い、「国際性」という語を彼らがどう捉えているか、また自分の国際性をどう考えているのかを調査した結果をまとめたものである。国際性にもっとも大切なものとして選択したのは語学力カテゴリーの記述が 44.2% と圧倒的多数であった。二番目に大切なものも、語学力カテゴリーの回答が最多であった。ずっと少数ではあるが、次いで、海外経験、コミュニケーション能力、行動特性などのカテゴリーの記述が続いた。また大学生たちの自らの国際性の評価は高くない。現代社会において国際性は役に立つという回答が圧倒的多数であり、自らの国際性評価は高くないにもかかわらず、国際性を伸ばすべく努力することにはあまり積極的ではないという結果であった。

大学生の国際性の意味の把握が語学力に傾いていることについて、また自らの国際性についての評価や構えなどについて、日本社会の風潮、教育現場における教育のあり方という観点から論じた。

キーワード：国際性、語学能力、コミュニケーション能力、海外経験

1. 問題と目的

“国際化の時代”といわれるようになってからすでに久しい。第二次大戦後朝鮮戦争を経て工業生産力を背景に経済大国へと変貌した日本は、工業製品を海外に輸出、海外の品物を輸入するという貿易という形の国際交流から、商社マンを海外に派遣したり生産拠点や販売拠点を海外に移したり人手不足を海外からの労働者で充足するなどの必要性が増し、人が動く形の国際交流も盛んになってきた。そのような社会状況を背景にして、国際化の時代に対応できる社会システムと教育システムが必要となってきた。地方自治団体は国際化を目標に掲げ、姉妹都市提携をしたり海外からの客人を迎えたり、国際的な

催しが盛んに開催するようになった。大学をはじめとした教育機関も、国際化時代に対応するために、1986 年に始まった「留学生 10 万人計画」が代表とするような留学生の受け入れの積極的な推進、送り出し学生数の増加のための努力などがなされ、海外に学術交流協定校を増やすなどしてきた。産業界、地域社会、教育界など日本の社会全体に、国際化の大きな波が押し寄せ来たのである。

そのような社会的な動きの中で、国際化、国際的、国際人、国際感覚、国際意識、など、国際を冠した語がいろいろな場面で広く使われるようになってきた。「国際性」もそのような語の一つである。

日本語の〇〇性という場合の「性」の意味は、「せい」と読む時は、生まれつき、さが、たち、傾向、sex、言語学的な意味での性などの意味となり、呉音で「しょう」と読む時は、生まれつき、性状のほ

1) 中部大学現代教育学部児童教育学科

かに、仏教的用語として“本質”の意味がある（広辞苑第5版）とされている。現代社会において「国際性」という語は、様々なところに使用されているが、書籍の題名、学術論文の題名、インターネットホームページなどにある「国際性」の語の用いられ方を調べ、その意味の違いをみたところ、いくつかの異なった意味の用いられ方を見出すことができた。大きく分けると、以下のような7つである。

その一は、たとえば、「俳句の国際性」（星野、1995）のような使われ方である。俳句は日本で生まれ、日本語を用いた詩歌であるため、海外では通用しないと考えられても不思議ではないのであるが、現在では日本語で作られた俳句が外国語に翻訳され、また外国語で俳句を作るということも広くなされるようになり、諸外国においても次第に俳句の芸術性が認められるようになっていく。今や世界各国で受け入れられ、世界各国に俳句協会が作られている。星野はその経過と俳句が外国人にも受け入れられた理由を論ずるにあたって、「広く世界に知られている、世界中で認められ愛されている」という意味でこの語を用いている。この使用法は国際的に活躍している個人にも用いられる。たとえば、イチロー、黒柳徹子、黒川紀章の国際性、などである。

その二は、たとえば「民間説話の国際性」（三宅、2000）におけるような、比較文化的に見た場合の「文化を越えた共通性、普遍性」を意味する使用法である。三宅はこの本で、世界各国の民間説話を取り上げ、別々な場所、別々の言語で語られてきた民間説話であっても、よく比較検討して見るといくつかのパターンを見出すことができ、パターンごとに共通項があって、普遍的な部分が見られることを説いている。

その三は、小堀遠州の国際性、与謝野晶子の国際性、などの用いられ方で、この場合はこの人たちが世界に知られているという意味ではなく、「諸外国の文化、事物、情勢などに目を向けていた人」だったという、その人物像を表現する言葉の一つとして用いられている。小堀遠州は江戸時代にあって茶道具として長崎を介して入ってきた器を珍重し、積極的に取り入れたという点で、また与謝野晶子は、世界情勢に目を向け、日本社会の枠の中だけで通用する考えに留まらず、広いものの見方を表現したとい

う意味で、その当時を生きた他の人々に比較して格段に、世界に関心を持ち目を向けていたということの意味している。

さらにその四は、「世界に出しても恥ずかしくない、世界標準となった」という、製品に関する強い自信を表現としての用いられ方がある（スガツネ工業）。ものづくり日本の工業製品の優秀さを記述する際に使われることが多いが、そのほかに優れた芸術作品などに対しても使用されている。

その五は、“研究者のための国際性プログラム”などのように使われる場合である。それは多くの場合、「英語を駆使したコミュニケーションが可能で、国際会議で発表するなどの能力を有している」ということを意味しているようである。このプログラムの内容は、英語によるディスカッション、プレゼンテーション能力の涵養が主眼である。さらに、大学院などでは“国際研究に必須な国際性、学際性、実際性を重視して教育・研究を行います”（広島市立大学大学院国際学研究科）のような表現もしばしば見られる。

その六は、“横浜の国際性”、“福生の国際性”、などのように、地域や建物など特定の場所に使われる場合である。この場合の意味内容は、「外国人が多く在住または滞在しており、外国に関心が高く、また外国に困んだ物や催しなどが多く、外国との交流の雰囲気漂っている」、といった意味内容のようである。他の例では、“国際性豊かなまちづくりをめざして”（横浜市都市経営局国際政策室）、“国際性のある人づくり、まちづくり”（埼玉県川越市）のように、スローガンとして使われることが多い。

その七は、「人に備わった特質」の意味として使われる場合である。“国際性豊かな人づくり”（神奈川県民部）などである。教育界においてもこのような使用例は多く、教育機関が掲げている目標、教育理念に“国際性”という語は頻出する。たとえば“国際性と総合性を持つ人材の育成”（公立大学法人横浜市立大学）、“国際性を重視した教育を積極的に”（西南学院大学）などである。この使われ方は外国語によるコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力とともに、より人格的な意味も付加して使用されているように思われる（以上の使用例はインターネットホームページによる）。

以上、“国際性”の使用例を見てきたが、この語が使用される際に、その“国際性”についての定義が提示されていることは稀である。多くの場合、この語を用いることでイメージや雰囲気作りには大いに貢献しているのだが、具体的には何を意味しているのかが明確にされていないことが多い。

特に教育界では、“国際性”はよく用いられている語である。“国際性を備えた人材の育成”、“国際性豊かな人間を育てる”、“国際性の涵養”のようなキャッチフレーズやスローガンは頻繁に使用されている。これらは具体的にはどのようなことを意味していると考えたらよいのだろうか。その教育機関ではどのような人間像を目標として教育をするのか、そしてどのような側面に焦点を当ててどういう教育をすれば国際性豊かな人間を送り出すことができるのか。どのような能力や特質を伸ばすことが目標とされているのか。「国際性」の語が頻繁に使われている割には、その内容が具体的には示されていないのである。この語を使用する側とこの語を受け止める側とでは、語のとらえ方がずれている可能性すらある。

以上のような問題意識から、“国際性”とは何か、国際性を養うとはどういうことを意味するのかを追究していく研究を計画した。まずはじめに大学生を対象とした自由記述を主とした質問紙調査を行ったので、本稿ではその結果を報告する。大学生達が“国際性”をどのように捉えているかを明らかにすることがこの調査の最大の目的であった。さらに性別年齢学部などの属性による違い、自分自身の国際性をどのように評価しているか、国際性をどれほど必要なものと考えているか、などについても検討する。

2. 研究方法

2-1. 調査手続

C大学学生を対象に質問紙調査を行った。対象学年は一年生から4年生である。平成20年度春学期共通教育の授業4コマ、1年生対象の専門教育の授業1コマの一部を利用して、受講生に無記名の調査を依頼した。調査用紙記入時間は約10分間であった。調査は共通教育4クラス、専門科目1クラスで行い、調査対象者は文系理系併せて20学科である。

有効回答数は436人であった。年齢は18才から26才(平均年齢19.6才)、性別は男性371人女性64人不明1人である。

2-2. 質問紙の構成

フェースシートでは年齢、性別、学科目を記入、氏名欄は設けず無記名とした。質問内容は、まず「あなたはいろいろなところで、「国際性を身につける」、「国際性のある人」、「国際性を育てる」、「国際性教育」などの表現を見たり聞いたりすることがあると思います。ここに使われている「国際性」という言葉は、具体的にはどんなことを意味しているのでしょうか。」という教示のあと、質問1では、まず国際性がある人をイメージさせ、国際性がある・ないという時に考える内容をできるだけ沢山、自由記述欄に記入してもらった。質問2では、質問1の回答のうち一番大切だと思うものに○、2番目に大切だと思うものに△をつけてもらった。質問3では、自分自身の国際性を、私は国際性が、大変豊かである～ほとんどない、の5件法で評定させた。質問4では、現代社会を生きる上で国際性が役に立つかどうかを、大変役に立つ～全然役に立たない、の5件法で、質問5では、「国際性豊かな人」といわれるよう努力したいかどうかを同様に5件法で評定させた。質問6では、今後外国に行くことについてどう思っているかを外国に滞在したい～外国には絶対に行きたくない、の5つからの選択式で回答を求めた。質問7では、日本国内での外国人とのつきあいについて同様に5つからの選択式で、質問8では、自文化他文化に対する4つの態度(文化的態度)をあらわす文章4つから選択式で回答させた。質問9では、・半年以上の留学または海外滞在経験の有無、国、期間、・外国人との親しい付き合いの有無、関係、期間、・外国旅行の経験の多少または無、回数、主な旅行先、日数、・外国滞在(在住)の経験の有無、主な滞在先、期間、をたずねた。

3. 分析の手順

3-1. 分析までの準備手続

3-1-1. 評定のためのカテゴリーの作成

人の国際性についての複数の記述の中から、もっ

とも大切なものについて○、二番目に大切なものに△をつけてもらったが、まずは○がつけられた約350個を用いて、カテゴリー作成の作業を行った。あらかじめ仮分類枠を作成し分類作業を行なって行き、その過程で分類枠の修正、下部カテゴリーの作成などの作業をしながら、最終的に8つの大カテゴリー、18の小カテゴリーからなる分類枠（Table 1）を作成した。

3-1-2. 一番大切なもの、2番目に大切なもの、それ以外の大切なものの確定

次に、複数の回答者の記述に、○や△がつけられていないものもあったため、○△の確定作業を行った。その方法は、自由記述欄に国際性についての記入が1つしかないものは○がつけられていなくても最も大切なものと判断されるので○とし、2つの記述しかなく一方に○の場合は、他方に△がつけられていなくても△とする、などである。また3つ以上の記述があるもので○△がまったくつけられていないものはすべて○△以外とした。この作業の結果、人の国際性に1番大切なもの（以下○とする）は

364個、人の国際性に2番目に大切なもの（以下△とする）は321個、1番目2番目ではないが大切なもの（以下☆とする）は774個となり、これらについてそれぞれ評価作業をおこなうこととした。

3-1-3. 評価作業

評価は2名（調査者と23才男性）で行った。まず、2名が別々に1,459個（○364個、△321個、☆774個）の記述に対して一つずつ、Table 1の小カテゴリー番号を用いての評価作業を行った。次に、2名が集まってその結果をつきあわせ、一致しているものについてはそのまま採用、不一致のものについては二人で合議し、合意に達したカテゴリーを採用した。一致率は、○で94.5%、△91.3%、☆90.0%とわけて高いものであった。その作業の中で意味不明のため削除すべきとの一致した判断により、△で2個、☆で63個の記述が除外され、以後の分析は○364個、△319個、☆711個の記述を用いて行うこととした。

Table 1 国際性に大切なものカテゴリー

大カテゴリー	小カテゴリー
1 語学	11 英語・英語など
	12 外国語、他言語、多言語
2 外国人との交流	21 (外国人との) コミュニケーション能力
	22 現に外国人との交流がある
3 国際的な活動・仕事をする人	31 国際的な有名人
	32 国際的な仕事をする人
4 国際情勢、外国文化に関心・知識、外国が好き	41 国際情勢に関心・知識
	42 外国文化に関心・知識
	43 外国に興味、海外が好き
5 外国経験・留学経験	51 外国旅行
	52 留学、在住
6 性格特性・性格特性	61 性格特性
	62 行動特性記述
7 考え方、価値観など	71 差別偏見がない
	72 他文化に対する理解
	73 広いものの見方、考え方
	74 自文化を知ること・誇り
	75 思いやりのところ
8 その他	

3-2. 結果と考察

3-2-1. 人の国際性に1番大切なもの（○）

364人から得られた364個の記述のカテゴリー分類結果をFigure 1に示す。英語、外国語に関する記述が圧倒的多数でそれぞれ76(20.9%)、85(23.4%)であった。次に多いのはコミュニケーション能力29(8.0%)、国際情勢等に関する知識関心23(6.3%)、行動特性(積極的、社交的、人見知りしない、など)20(5.5%)である。

国際性に一番大切なものとして語学(特に英語)能力についての記述が多くなるであろうことは予想されたが、その比率は非常に高かった。英語と特定しているものと特定せず外国語としているものを合わせた語学大カテゴリーに入る記述は161で、全体の44.2%となった。

このことは、大学生たちがこれまで受けてきた教育の中で、またマスコミや周囲の人々たちの影響の中で、国際性に一番大切なものは語学、特に英語、という考え方になっているということを示している。国際化、国際的、国際性という言葉が出てくるとき、そこにイメージされるものは、英語でのコミュニケーション、外国語を使って外国人と交流をする、ということになるのだろう。これまでの学校教育の

中で、またテレビやラジオ放送や書物のなかで、国際という言葉がつかわれるとき、そこには外国語が使われる状況が伴い、国際化と外国語がセットで現れる場面が多く、その結果として“国際”を考えるときにはすぐに外国語(特に英語)が必要という思考回路ができていてのではないかと考えられる。おそらく今の大学生達は、外国に行くのだったら英語ができなくてはつまらない、家に外国人を迎えるには英語を練習しなければという大人たちの考えや、学校教育における英語学習の比重の置き方を受けて、英語は大切、国際的に活躍するには英語は不可欠、という考えに傾いているのではないかと考えられる。

3-2-2. 人の国際性に2番目に大切なもの（△）

319人から得られた319個の記述の評定結果をFigure 2に示す。ここでも英語、外国語に関する記述が一番多く、それぞれ26(8.2%)、48(15.0%)であったが、次に多い国際情勢等に関する知識関心30(9.4%)、外国文化に関する知識関心28(8.8%)、コミュニケーション能力27(8.5%)、現に外国人との交流があること24(7.5%)、行動特性20(6.3%)と続き、他のカテゴリーのものの増加は見られるが、

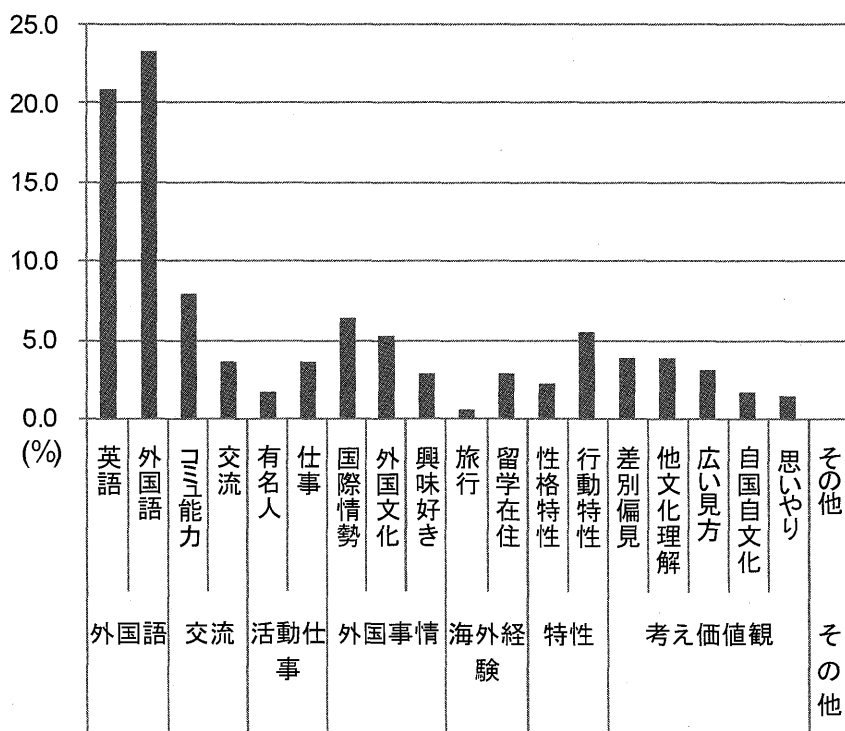


Figure 1 国際性で一番大切なものの記述の分類結果 (364名、364個)

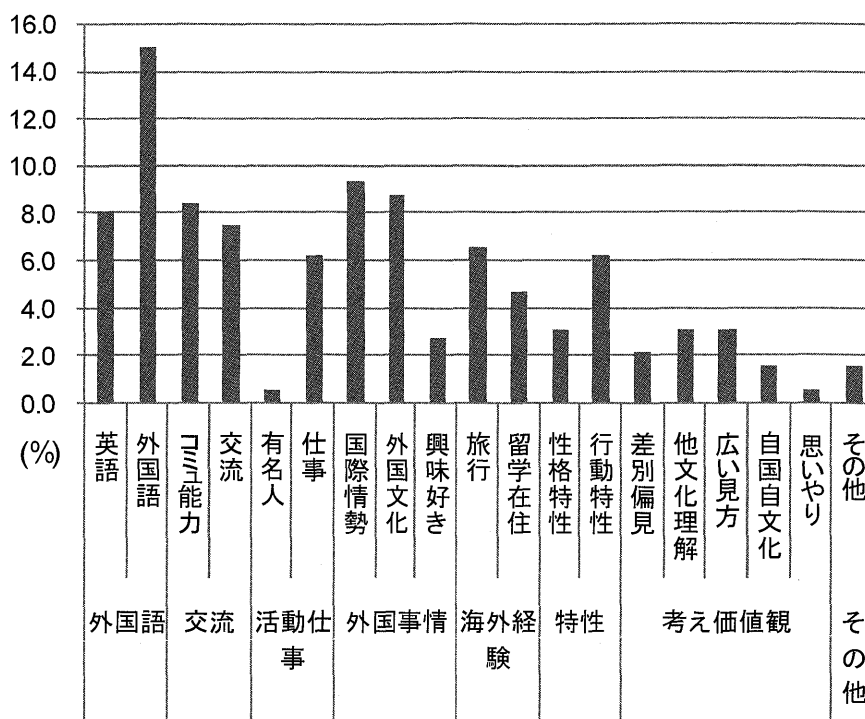


Figure 2 国際性で二番目に大切なものの記述の分類結果 (319 名、319 個)

なお外国語・英語に関する記述は最多である。

ここで注意すべきことは、二番目に大切なものとして語学カテゴリーのものを選んだ者は英語、外国語併せて74名(全体の23.1%)だったが、一番大切なものとして英語・外国語に○をつけなかった者で二番目に英語・外国語を選んで△をつけた者も多いと思われることで、一番目二番目のどちらかで語学能力を選んだものは単純合計で67.3%あることから、おそらく60%以上が大切なもの2位以内に語学を選んでいると思われることである。この結果からも、国際＝英語、国際＝外国語という大学生たちの思考パターンの存在が推測できる。

3-2-3. その他人の国際性に大切なもの(☆)

次に、一番目二番目以外で大切なこと(☆)の記述の評定結果を見ていく。ここに入る記述は○△を除いたものだが、記述数が4以上の被験者も多数あるので、ここでは人数と記述数とは一致していない。711個の記述の評定結果をFigure 3に示す。

ここでも英語49(6.9%)、外国語80(11.3%)と語学に関する記述が比較的多いが、それに続いて多いのは、旅行80(11.3%)、留学、海外在住などの海外経験46(6.5%)に関するものであった。大カテゴリーで見ると海外経験に関する記述126、語学に

関する記述数129と、ほぼ同数となっている。大学生にとって国際性というのは、海外に出るということとかなり強く結びついているらしいということがわかる。海外経験がある人は国際性がある、留学経験がある人は国際性がある、または国際性が身に付くには海外に出るとよい、海外在住や留学、あるいは海外旅行などの海外経験が多い方が国際性があるというふうに考える人が多いようである。

日本国内にも外国人が多数在住しており、国内にも異文化接触や外国人との交流の機会はたくさんある時代になってきているが、おそらく大学生にとっての国際性は、日本国内における外国人達との交流の中で養われるものとはあまり考えられていないであろう。あるいは国際ということばかり連想するものが“海外”であるということなのかもしれない。

以上のようなことから、大学生にとっての国際性は、一にも語学二にも語学、三で海外経験ということになる。一般的な傾向としては、まずは語学力(特に英語力)をつけて(または語学力をつけるために)海外へ行き、外国語を使いながら外国での活動することによって国際性は身につくと考える、ということ言えるだろう。

その次に多かったのが、交流大カテゴリーの記述で、コミュニケーション能力があること(41個)と、

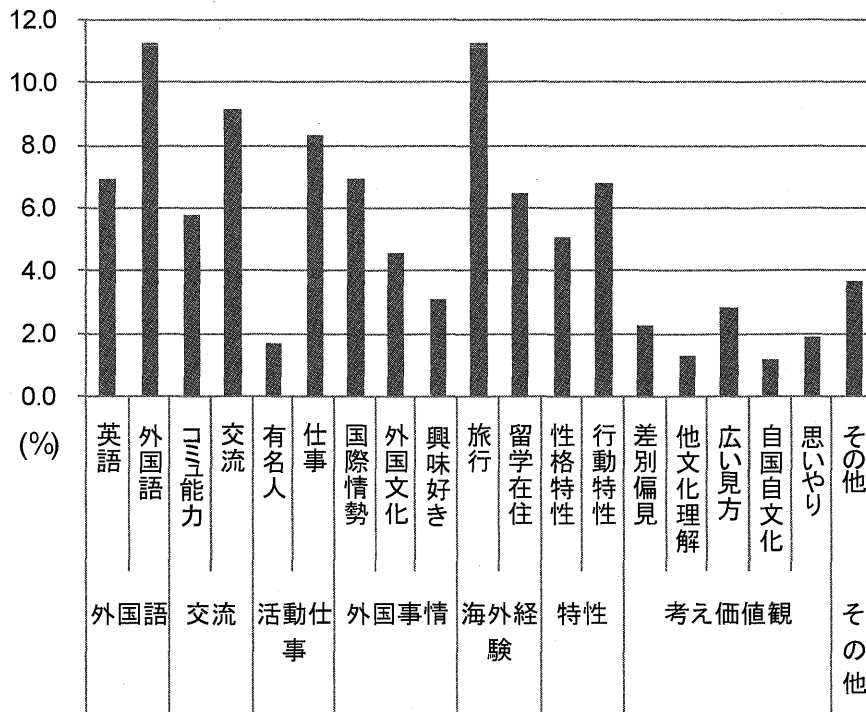


Figure 3 国際性で一番目二番目以外で大切なものの記述の分類結果 (全 711 個)

外国人と実際に交流があること (65 個) というカテゴリーの記述である。さらに実際に海外で仕事をしていることというカテゴリーの記述も多い (59 個)。海外で仕事をしているということはつまり外国人とコミュニケーションをしながら働いているということであろうから、現に外国人とのつきあいがあることや、つきあいはなくとも外国人と出会ったときにコミュニケーションができるということが大切だと考えられているようである。コミュニケーション能力というカテゴリーに入る記述の中には、“英語ができなくても何とかコミュニケーションする” というような記述もないではないがごくわずかだったことを考えると、このコミュニケーション能力の意味は、英語ができ、それをうまく使って人間関係を作り、外国人と話ができること、という意味合いが強いと思われる。

次に、行動特性・性格特性などに関する記述も多かった。よく日本人はシャイと言われる。いくら語学ができてもなかなか話しかけることができなかったり、たとえ話しかけられても聞くばかりで積極的に自分から話すことができない人が多いといわれるが、人見知りしないでどんどん話しかけたり、自らが積極的に動かないとなかなかスムーズなコミュニケーションがとりにくいため、明るくて楽観的な

性格のほうが気軽にそのような行動をとりやすいと考えられているのではないだろうか。

この性格特性・性格特性カテゴリーと外国人との交流カテゴリーの記述が比較的多かった結果をつなぎ合わせると、積極的・社交的な人で、臆することなくどんどん出て行けるような性格の人は、外国に出て行ったり、外国人達とコミュニケーションをうまくとることができ、その結果として実際の外国経験、外国人との交流、外国での仕事の機会が多いと考えられているということではないだろうか。そしてその時の使用言語は、英語やその国の言葉であり、少なくとも日本語ではない言語のコミュニケーションを、大学生達は念頭に置いているようである。

その次にやっと、国際情勢や異文化に対する興味関心、考え方、価値観などが出てくる。1996 年中央教育審議会第 1 次答申 (21 世紀を展望した我が国の教育のあり方について) を受けて文部科学省の方針が出されて以来、学校現場では総合学習や社会科の時間などを利用して国際理解教育がすこしずつ導入されてきている。現在大学生となっている世代は、小学校から高校まで 12 年間の教育のなかで国際理解教育も受けきた世代であろう。答申の中では、広い視野、異文化に対する理解や受容の心、思いやり、自己自文化への誇り、コミュニケーションのための

外国語能力などが大切と謳われている。異文化理解の心、態度を養うことに比重が置かれており、英語は目的ではなく手段という位置づけである。しかし今回の調査結果からは、まだ高校から大学に入ってもない大学生達には、文部科学省が意図したような国際理解教育の成果はあまり出ていないことが推測される。これは国際理解教育を行う教師の考え方が子どもたちに反映した結果である可能性もあり、また学校教育よりも一般社会の価値観の影響が強く、国際理解教育の中で教育する側が意図していたものが子どもたちにはうまく伝わっていないという可能性も考えられる。

3-2-4. 性差についての検討

国際性に一番大切なものの回答を男女別に分けて、その分布を見たのが Figure 4 である。

全体の男女の回答の分布の形はよく似た形となっており、回答の比率はほぼ同様の傾向がある。英語と外国語では数が逆転しているが、これは同じ外国語大カテゴリー内であり、英語と特定したかしないかの違いであり、大きな違いとは考えられない。

男女ともに一番大切なものとしては外国語を挙げているのは同様であるが、比較すると女性の外国語

重視傾向がやや低く（外国語合計、男性：45.4%、女性 38.1%）、女性は一番大切なもので文化に対する理解（9.1%）や文化に対する知識・興味（9.1%）が外国語の次に多かったが、男性のほうはこの傾向が見られなかったことである。これはおそらく女性の方が、ファッションや料理音楽など文化的なものに興味を持っている人の比率がより多く、国際性という言葉から、外国の文化を理解することという連想が多いと理解することができるかもしれない。しかし今回の調査では女性被験者数が 64 人（全体の 14.7%）と少なかったため、この点を明確にするにはもう少し被験者を増やして検討することが必要である。

3-2-5. 年齢差についての検討

年齢別グラフ（Figure 5）をみると、18 才 19 才においては外国語カテゴリーに入る記述が多い。年齢差はわずかではあるが、大学に入学して日が浅い 18 才 19 才の方が、20 才以上の人と比べると国際性といえは外国語が大切という判断をする人の比率が高くなっている。まだ高校までの英語学習の時間数の多さなどの影響が残り、国際性＝語学という考えが強いと考えることができる。

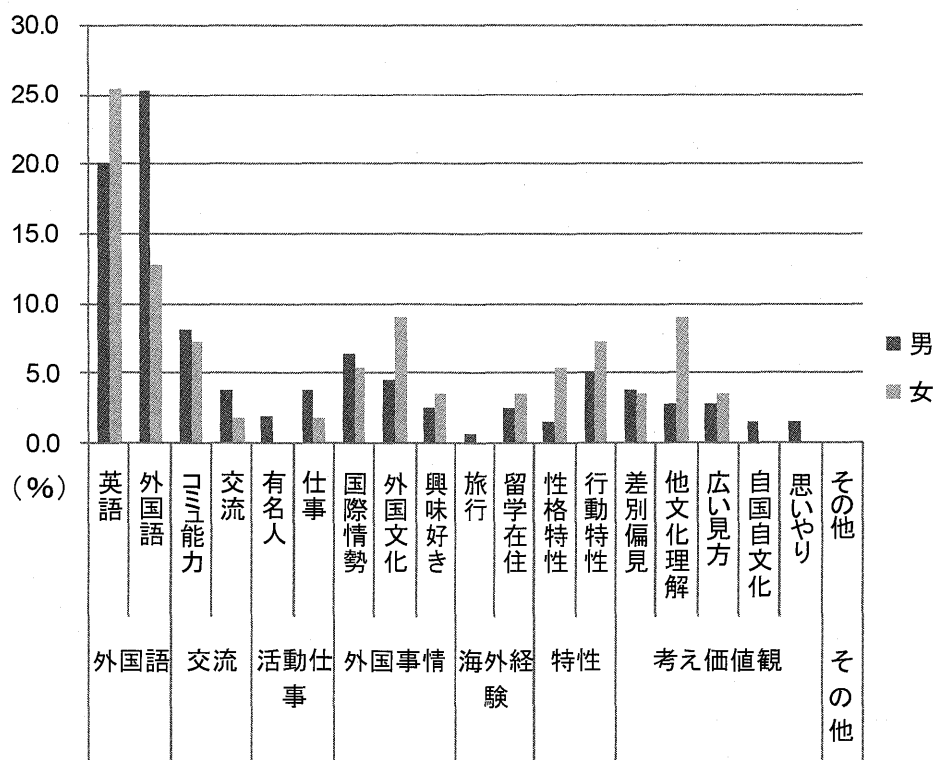


Figure 4 国際性で一番大切なものの記述の分類結果（性別）

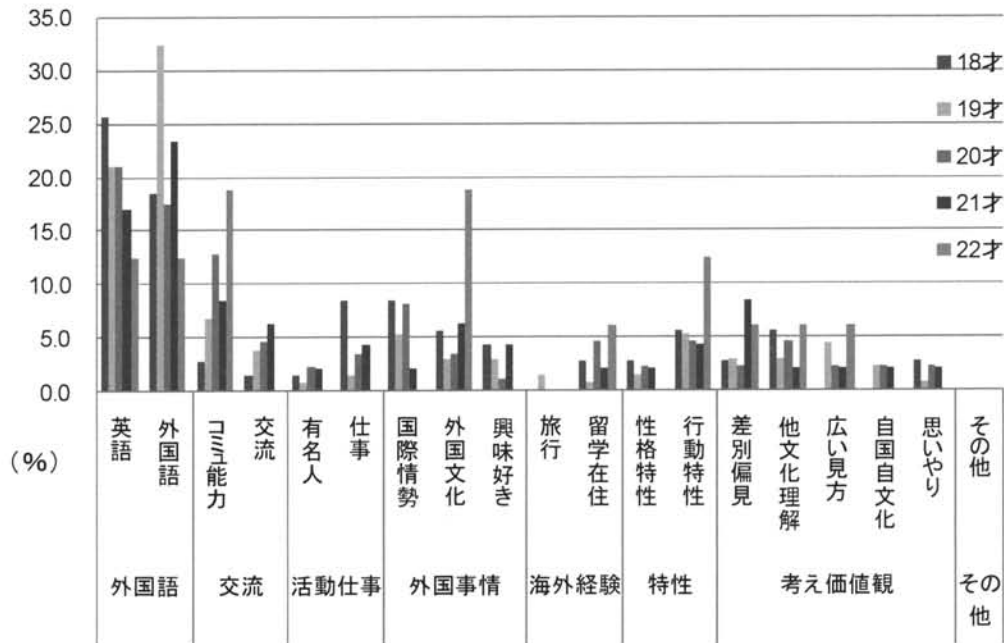


Figure 5 国際性で一番大切なものの記述の分類結果 (年令別)

年令が高くなって行くにつれて語学の最重要視は少なくなり、その分他のことに回答が分散していく傾向がみられる。コミュニケーション能力 (22才: 18.8%、20才: 12.8%)、外国文化興味・知識 (22才: 18.8%)、行動特性 (22才: 12.5%)、差別偏見 (21才: 8.5%) などである。おそらく学年、年令が上がるほどものの見方も広くなり、語学以外の要素についても考慮することができるようになるということではないかと思われる。しかし今回の調査では、調査対象が大学学部生であって年令幅が小さく、23才以上の学生数がごく少数しかいなかったということもありそれ以上の年令の人の傾向をみることはできなかつたため、結論の一般化は難しい。今後調査対象年令を上げた調査を行うことにより、より高い年令の人たちの意見をも聞くことで、この点についての検討が可能になるだろう。

3-2-6. 学部・学科別の検討

つぎに、学部・学科別の回答分布をみてゆく。調査6学部ともに、外国語大カテゴリーの記述が多いのは同様である。英語、外国語をあわせた外国語カテゴリーは、理系学部の工学部で50.0%、応用生物学部47.6%、文系学部の児童教育47.8%、経営情報45.1%、人文学部36.5%、国際文化学部23.6%となっている。理系と文系の明確な違いは見られな

かった。国際文化学部をのぞく5学部は大体同じような傾向のカテゴリー分布を見せている (Figure 6)。

国際文化学部生の記述は、他の5学部の回答分布と少し異なった点が見られる。外国語を一番大切なものであるとした者の比率が他学部と比較して一番低いのである。その分は、実際に海外で仕事をしていること (17.6%)、他文化理解 (11.8%)、広いものの見方 (11.8%)、思いやり (11.8%) の比率が他学部と比較して高くなっている。ここに、国際文化学部の特徴が現れていると見ても良いかもしれない。国際文化学部に入学者はもともと国際的な仕事に興味を持っていたり、外国志向である人が少なくないと思われることから、実際に国際的な仕事をするのが大切という回答の比率が高くなったのではないと思われる。また国際文化学部の教育によって、他学科学生よりは異文化理解、広い見方、思いやりなどの大切さなどについての話を聞く機会が多く、多角度から考えられるようになっていくことを示すものかもしれない。外国語に関する記述の率についてみれば、国際文化学部について人文学部がその他の学部よりも外国語を最重要視する人の比率が低くなっているが、人文学部には英米文学科があり、この学科の入学学生は国際文化学部生と同じような傾向が見られ、全員が留学必須

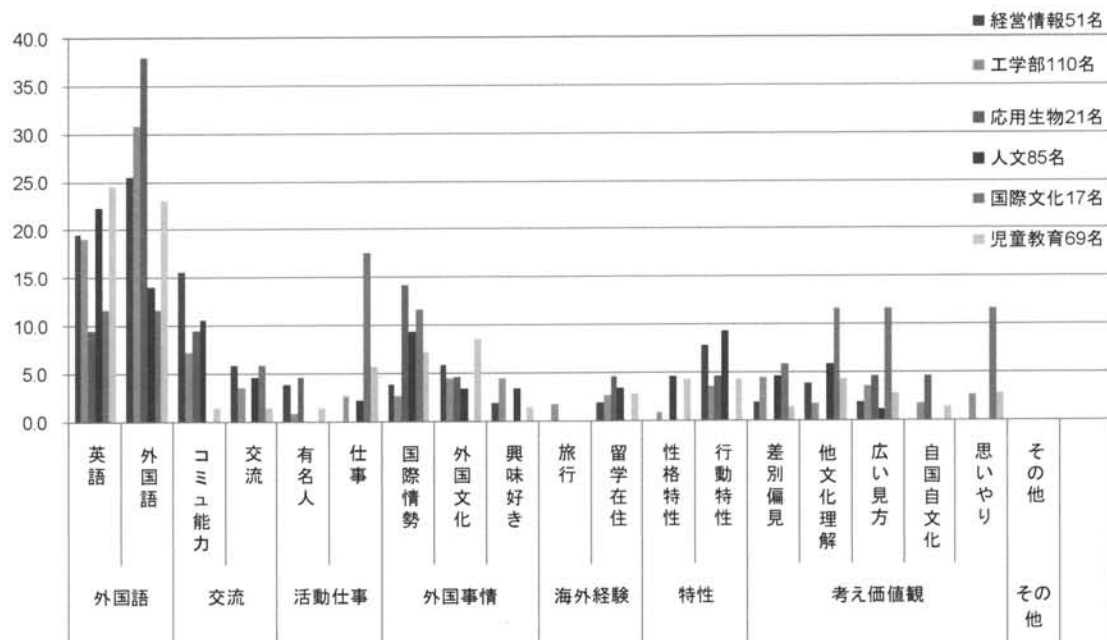


Figure 6 国際性で一番大切なものの記述の分類結果 (学部別)

であることとの関連で異文化適応実習や講義など国際文化学科学生と類似した教育機会があり、その結果同様な傾向が見られるのではないかと推測できる。このため人文学部全体を平均すると、すこし外国語重視傾向が減じたのではないかと考えられる。

3-2-7. 学生の国際性自己評定と異文化に対する積極性等について

3-2-7-1. 自己の国際性についての評定結果

ここでは質問3の回答について検討する。この項目は自分の国際性はどのくらいあると思うかを5段階で評定させるものであった。その結果はFigure 7に示した。

国際性については、少ない、全くない、の二つで72%に達しており、さらに21%の学生が普通程度と評定している。国際性がある方というのはわずか7%であった。半数以上の人が自分の国際性は低い、あるいはない、と評定しているのである。

この結果は、おそらく前に見た国際性の最重要なものを外国語としている者が多かったことと関連しているであろう。国際性といえば外国語力(英語)と考える学生は、外国語があまり得意ではない、英語で会話ができないということで、自分の国際性は低いという判断をしているのかもしれない。

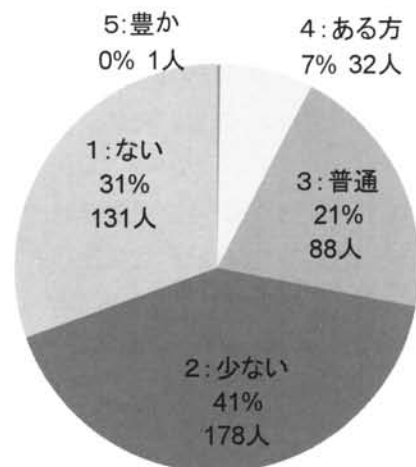


Figure 7 自己の国際性評定(回答:430名)

3-2-7-2. 現代社会において国際性は役に立つか

その次に問うたのは、現代社会を生きる上で国際性があることはどれだけ役立つか、という質問である。この質問に対して大変役立つ(29%)、役立つことが多い(54%)、を加えると役立つと答えた者は実に約83%に達している(Figure 8)。これからは国際化の時代という考え方はかなり浸透していると考えて良いだろう。前述したように、被験者の学生の約半分近くが国際性でもっとも大切なことは英語、外国語、と外国語をイメージしているようなので、この回答のなかには実際に外国語(英語)が堪能になっておくとそれは役立つ、という思考回路で回答した者もあっただろう。外国語をイメージした者、コミュニケーション能力や実際に外国人との交流を

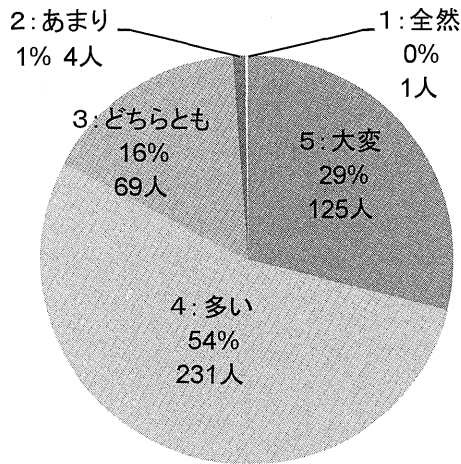


Figure 8 これからの時代に国際性は役立つ
か (回答: 430 名)

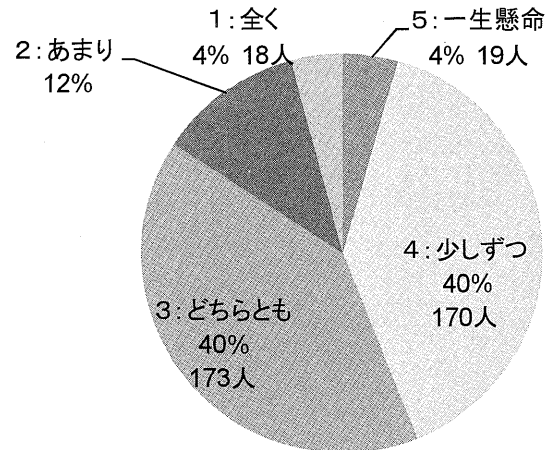


Figure 9 国際性を身につけるよう努力するか (回
答: 430 名)

すること、外国に関するいろいろな興味関心をもつこと、などが大切と思う者などイメージした内容は異なるかもしれないが、いずれにせよ国際性を身につけることが現代社会において役立つという認識は明確にあることが明らかになった。

3-2-7-3. 国際性豊かな人になるよう努力をするか

上記の二つの質問項目に対する回答から、自己の国際性は高くない、そして国際性を身につけておくことは現代社会において大変役立つ、とおおかたの学生は考えていることがわかったが、それならば、国際性豊かな人になるよう努力をするという回答が多いのではないかと考えたが、結果は必ずしもそうではなかった (Figure 9)。一生懸命努力するはわずか4%であり、少しずつ努力するが39%である。どちらとも言えないが40%、あまり積極的に努力しようとは思わないが12%、全く努力するつもりはないが4%で、国際性を身につけることに関しては積極的ではない反応が半数以上であった。現在、大学に入学してくる学生達の学習意欲が低くなったといわれており、大学における初年次教育の必要性などが議論されるようになってきているが、この結果からも、役に立つこととわかっていても努力をしようとはしない学生達の意欲の低さが感じられる。

3-2-7-4. 今後自分が外国へ行くことについての考え

今後外国に行くことについてどのように考えてい

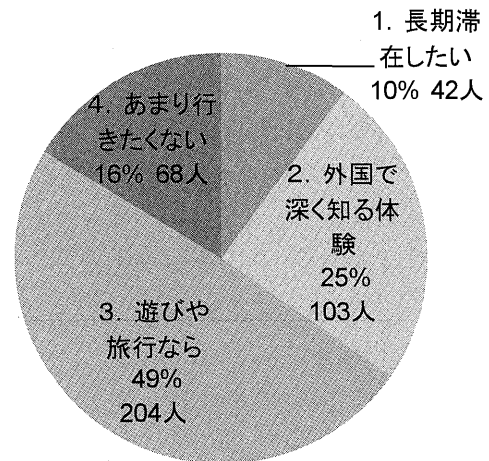


Figure 10 外国へ行きたいと思う程度 (回答:
426 名)

るかを5つの文章から選択することで回答を求めた結果を Figure 10 に示す。遊びや旅行なら外国に行きたいが49%で最多であった。長期滞在し仕事や勉学をしたいが10%、外国で現地の人々を深く知る体験をしたい25%をあわせると35%の学生が外国へ行くことについては積極的な気持ちを持っている。国際性豊かな人になるような努力をする程度を問うた前問に対する回答で、一生懸命ないしは少しずつ努力するという回答はあわせて44%であったが、おそらく44%のうちの大多数はこの、外国への積極的な気持ちを持っている者ではないだろうか。しかし、外国へ行くことについての考えによって国際性に大切なものの回答にはさしたる差はなく、いずれも一番大切なもの二番目に大切なものとして外国語能力と回答が多いことにおいては同じであっ

た。外国へいくことに興味を持っている学生においても、彼らが必要と考えているのは外国語が最も多いということを見ると、現代社会において国際性が役立つというのはほぼ外国に長期間出るときということであって、国内にいる限りではあまり必要がないと考えている学生が多いのではないと思われる。

3-2-7-5. 日本国内での外国人との交流志向

日本国内での外国人達とのつきあいについては、仲間として一緒に仕事や勉強をしたい(29%)、ボランティア活動などで援助したい(8%)、交流してもよいが積極的に機会を探す気持はない(42%)、交流したいと思わないが必要なら普通につきあう(19%)、できるだけ接触したくない(2%)、となっている(Figure 11)。この結果からは、国内での外国人との交流については、積極的な者も37%見られるが、多くはあまり積極的ではなく、かといって拒否的でもなく、流れに任せるという受け身的な気持ちの者が約61%と多いことが読み取れる。

3-2-7-6. 文化的態度

ここでは異文化に接した時の自文化異文化に対する考え方として、外国文化より日本文化中心に考えたい(自文化中心主義)、外国文化を学び身につけたい(他文化中心主義)、どちらも積極的に学んで自分に取り入れたい(積極的折衷主義)、どちらも自然に身に付けばよい(消極的折衷主義)の4つの文化的態度についての記述を選択させた。結果はFigure

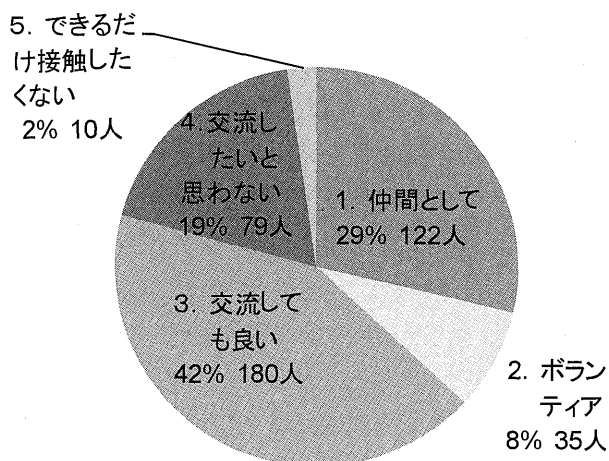


Figure 11 外国人とのつきあいについての希望(回答:426名)

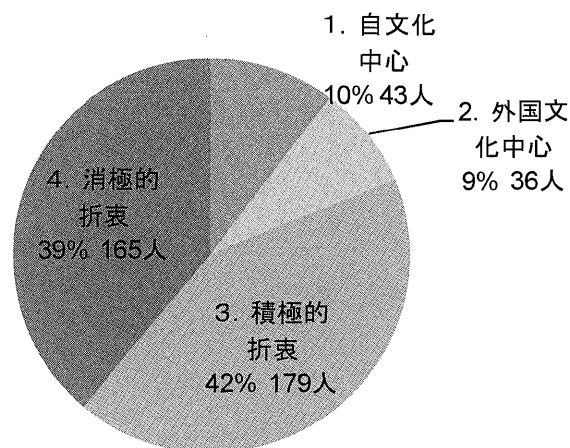


Figure 12 文化的態度(回答:423人)

12に示した。自文化中心主義10%、他文化中心主義9%、積極的折衷主義42%、消極的折衷主義39%であり、きわめて常識的な回答分布だといえることができるが、社会的望ましさという観点からはもう少し積極的折衷主義の回答率が高くなっても不思議ではない。積極的折衷主義と消極的折衷主義が殆ど同じぐらいの比率になっていることに、今の学生の積極的に何かをやらうとしない、努力はいや、という雰囲気が感じ取れる。

3-2-3-7. 海外経験

さらに質問9では、・半年以上の留学または海外滞在経験の有無、国、期間、・外国人との親しい付き合いの有無、関係、期間、・外国旅行の経験の多少または無、回数、主な旅行先、日数、・外国滞在(在住)の経験の有無、主な滞在先、期間、をたずねた。今回の調査の被験者たちで半年以上の海外経験のある者は5名、国内国外の外国人との交流経験がある者は76人であった。また外国旅行経験は多い14人(3.4%)、少ないがある135人(32.7%)、ない264人(63.9%)、となり、短期の海外滞在経験があるものは31人(7.5%)であった。

4. 総合考察

光田(1999)は、国際化という語に関してその著書の中で、『人によっては英語がぺらぺら話せるようになるのを国際化と考えている。外国人と上手につきあうのを国際化の目標とする人もいる。フォー

ク・ナイフを上手に使い、スプーンを音を立てずに飲むのを国際人としてのマナーと強調する人もいる。日本語を含めて日本の独特の文化を世界に紹介し認識してもらうのを国際化の急務と考える人もいる。さまざまであるが、共通して言えることは、みんなが現状のままでは駄目だ、何かをしなくてはならない状態であるという認識を持っていることである。そうして、そのために「国際交流」を進めなくてはならないという認識も共有のものとしてある。』と述べて、国際化のイメージが人によって異なること、そして日本人の考え方の特徴を述べている。また多くの欧米人は多数の国が加わっている社会を通常社会として、自国もその一員として世界を動かしているという感覚をはじめから持っているのに対して、日本人の特徴として、日本社会とは別個のものとして国際社会を想定し、日本の外にある模範的国際社会に日本が入れてもらうという発想あるいは感覚があることを指摘している。江淵（1997）も、英語の internationalize は明らかに自分中心に考えて他を国際化しようとするときに使い、自分は他者を国際化する主体であるという“する”という他動詞としての使われ方が多いのに対して、日本語の国際化は、自分自身が国際化される、自分自身が変化して国際的になるという“なる”という自動詞の使用法の言葉として使われていると述べている。これらの指摘は国際性という語の使用法について考える際に参考になる。

本調査の結果から、学生達は国際性を考えるとき、まずは日本語以外の外国語を用いて海外に行ってコミュニケーションをすることが頭に浮かび、日本国内の国際交流の場はあまり意識に上らない傾向があることを見た。学生達の国際性に関する回答の中で外国語、特に英語が大切という学生が一番多いだろうということは想定できたが、この傾向は想定以上に強いという学生達の現状を知ることができた。この学生達の感覚は、自分たちが海外へ行って、国際経験を積むことによって国際性を身につけ国際社会に入れてもらうという発想、そして自分たちが相手国の言語を学び、相手のコミュニケーションスタイルを身につけるという自分の変化によって自らが国際化する、という光田、江淵の指摘によく合致している。

国際社会化はますます加速の度を加え、日本国内における在留外国人数はここ数十年間増加の一途をたどり、2007 年末現在で 215 万 2,973 人であり総人口の 1.7% を占めている（法務省、2008、総務省、2007）。なかでも愛知県は東京都と並んで住民に占める外国人の比率は 3.0% と、最も高い県となっている。このことを考えると、これまでのように国際的に活躍することは海外に出ること、国際的視野というのは日本以外を見ること、国際コミュニケーションとは英語で話すこと、というワンパターンの思考回路を脱して、日本国内で、内なる異文化と多くの在留外国人の存在を認識し、たとえ日本語でのコミュニケーションを用いての意思疎通の中にも国際的交流が可能であり、国際性は必要であるという認識がもっと必要なのではないかと考える。

前述のように、中央教育審議会第 1 次答申「新しい 21 世紀を展望した我が国の教育のあり方について」なかに、国際理解を背負っていくべき若者に対する国際理解教育の必要性が盛り込まれたのは 1996 年のことであり、その中には「広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。・国際理解のためにも、日本人として、また個人としての自己の確立意を図ること。・国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基本的な力を育成する視点から、外国語能力の基礎や表現力等をコミュニケーション能力の育成を図ること。」が教育目標として書かれている。ちょうどこれが出された頃に小学校に入学した今の大学学部生に対する調査を今回は行ったわけであるが、彼らがそれより上の世代の一般の日本人の考え方をそのままに踏襲し、とくに新しい国際理解への感覚を持っているようには見えないということは、国際理解教育の実効性がまだその姿を現すには至っていないことを示しているとも考えられる。現在の国際理解教育のあり方に、そして今後の国際理解教育の方向性を考えていくことに、今回の調査の結果は示唆を与えるものではないかと考えられる。

また、現代社会において国際性を身につけておくことが役立つと考えている学生が 8 割を超えるにもかかわらず、国際交流の機会を自ら求めていくとい

う姿勢や、国際性を身につけるために積極的に努力をしようという姿勢を見せる学生は半数以下であるなど、学生達の一生懸命努力をしようという気持ちのなさも目につく。やればよいと分かっていることでも、少しずつで良い、自然に身につけばそれよいという考えで、自らが獲得のための努力をしようとする人は少ない。国際交流についても、機会があればしたいという気持ちがあっても特に自分から積極的に機会を求めず、自然に交流機会があればするという、自らが動くことをせず受身的な姿勢の者が多い。

これらの傾向は、こと国際交流に関することのみではなく、現代の学生達の特徴として多くの場面ですでに語られていることではあるが、今回の調査結果からもその傾向が確認できた。今後日本の将来を担う若者たちの無気力さ、積極性のなさについての対策も、今後真剣に考えていかなければならない問題であろう。

5. 今後の課題

本校で報告したのは調査の一部分である。時間と紙面の制限のために、今回はこれ以上の分析結果を載せることはできなかった。今後このデータをつかってもう少し細かくまた異なる角度からの分析をしていくことが当面の課題である。また年令幅が少なかったこと、男女比に偏りがあったこと、などから十分な分析ができなかったことも反省点である。今回の結果がC大学学生の傾向なのか一般の大学生共通の傾向なのかも明らかではない。さらに多くの異なる調査対象者を求めることにより、これらのことを検討していくことが次なる課題である。

付記

この研究は中部大学特定研究費 201L12A を受けて行った研究成果の一部である。

引用文献

- 江溯一公 1997「大学国際化の研究」玉川大学出版部
 星野慎一 1995「俳句の国際性」博文館新社
 法務省入国管理局 2008 外国人登録者統計
 木下照嶽・小林麻理・中島照雄 2004「新版現代会計—創造性/学際性/国際性」創成社
 光田明正 1999「国際化」とは何か 玉川大学出版部
 三宅忠明 2000「民間説話の国際性」大学教育出版
 総務省統計局 2007 推計人口
 文部省 1996 教育審議会第1次答申 921 世紀を展望した
 我国の教育のあり方について」

参考インターネットホームページアドレス

- <http://www.enshuryu.com/kokusai.htm> 遠州茶道宗家
<http://www.enshuryu.com/kokusai.htm> 大阪府立大学人間社会学部
<http://www.city.yokohama.jp/me/keiei/kokusai/foreigner/forum/forum.html> 横浜市都市経営局国際政策室
<http://www.fussakanko.jp/> 福生市観光協会
<http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/town/174/index.html> 川越市市長室国際交流課
<http://www.seinan-gu.ac.jp/daigaku/kyoiku/kokusai.html> 西南学院大学
<http://www2.igss.ynu.ac.jp/~miryoku/> 横浜国立大学大学院国際社会科学研究所
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/hoka/global_eye.htm 立命館大学法科大学院
<http://www.seinan-gu.ac.jp/daigaku/kyoiku/kokusai.html> 西南学院大学
<http://www.nanzan-u.ac.jp/Menu/gp/nap/international.html> 南山大学
<http://www.kolmar.co.jp/feature/international.html> 日本コルマー株式会社
<http://www.sugatsune.co.jp/index.html> スガツネ工業
<http://www.mufg.jp/ir/presentation/backnumber/pdf/slides080419.pdf> 三菱 UFJ フィナンシャルグループ

受付日 2008 年 9 月 30 日

受理日 2008 年 11 月 4 日

Abstract

The word “internationality” is often used especially by educational institutions, when they refer to their educational philosophy or make catchphrases.

The purpose of this study is to know how university students interpret the word “internationality”, and how do they perceive their own internationality.

According to my research of 436 students, 44.2% answered foreign language ability (especially English) as the most important factor in internationality. To a much lesser degree, overseas experiences, communication ability, and behavioral characteristics were indicated also.

Students evaluated their own “internationality” as low. They regarded “internationality” very useful in the modern world, but they lacked incentive to try hard to gain more internationality themselves.

These results are further explained from a Japanese societal and educational perspective.

[Keywords] communication ability, internationality, language ability, overseas experiences